

蕭紅・蕭軍往復書簡～北京——上海～

翻訳と注釈

平石淑子

この往復書簡は、蕭軍『蕭紅書簡輯存注釈録』（以後『注釈録』）¹に収録されているもので、筆者の「東京から——蕭紅書簡 翻訳と注釈（上・下）」²の続編に当たる。

1936年7月から東京に留学していた蕭紅が、留学予定期間を繰り上げて帰国したのが1937年1月。王徳芬「蕭軍簡曆年表」³によれば、1月9日午後1時、横浜から秩父丸に乗った蕭紅は、13日の午後に上海に到着している。帰国した蕭紅は『魯迅先生紀念集』⁴の編集の仕事に加わるが、その一方で、二人は北京に住まいを移すことを考え、4月23日、まず蕭紅が先に行って部屋を借りる、という手はずとなった。しかし『魯迅先生紀念集』の編集作業が滞ったため、結局5月中旬、蕭紅は上海に戻り、北京移住の話はそこで立ち消えとなったようだ。

そもそも蕭紅が予定を繰り上げて日本から帰国した原因は蕭軍の恋愛問題にあったと言われ⁵、二人が北京移住を考えたのも、そうしたしがらみを断ち切る手段であったのだろうが、北京移住は実現しないまま日中戦争が勃発し、二人はほかの文学者たちと共に武漢に避難することになる。

蕭紅の東京からの書簡には蕭軍の返信は無いが、北京からの書簡には蕭軍の返信が付されており、興味深い。『注釈録』では蕭紅書簡の後に蕭軍の書簡が付録として別に収録されているが、ここでは二人の書簡を時間順に並べ直し、やりとりをより明らかにした上で、当時の二人のやや危うい関係を知る一つの資料としたい。

紅-1：1937年4月25日（三十六）⁶

軍：

午後2時です。揺れが酷くて殆ど字が書けません。

汽車はもう黄河橋⁷を渡りましたが、私の心はまだ宙ぶらりんのままみたい。道々見えるのは伐採された、葉の落ちた木と白いアヒルたち、そして西安から戻ってきた東北軍⁸です。馬は線路の脇で草を食んでいたりと、貨物車の中に並んで立っているのもあります。馬の背中が一本に繋がって、魚の背骨みたいです。貨物車には「津浦」⁹と書かれています。

持ってきたリンゴを一つ食べ、たばこは二～三本呑んだだけ。あらゆる欲望が大したことなくなってしまうみたいで、ああ嫌だ、嫌だ。

今三日目の午前9時です。汽車は小さな駅に停まっています。今私は応接室にいます。窓の外

の平地は皆お墓、しかも遠くにはカラスやほかの大きな鳥が飛んでいます。昨夜から見るともう随分北方にきています。今朝は早く目が覚めました。素晴らしく天気がよかったので、外の景色を見たいと思ったのです。

あなたは今何を考えているのかしら。

たった今いくつかの梨畑を通りました。とってもきれいで、朝霧の中にぼんやりと白い色が見える。

東北軍は並行する線路をあんなにたくさん運ばれていく。一輛や二輛じゃない。私はもう三、四回見ています。その人たちは皆トビハゼみたいになって、馬と一緒に小雨の中。彼らの喜びはどこから来るのかしら、それでも騒いだり笑ったりしている。

汽車が動き出すと字がうまく書けないわ。

唐官¹⁰一帯の土地は、元々の土の色そのまま。植え付け最中のところもあるし、黒い牛や白い馬が鋤を引いているところもあります。

この手紙、昨日出すはずだったの。だけどポストが見つからなかったので、もう少し書いてみます。

着いてすぐ迎賓寓所に行ったのですが、よくない。そこで中央飯店に泊まることにしました。一日2元です。

すぐに周さん¹¹の家を訪ねたのですが、本当に変、どこにあるの。人力車で宣外¹²に行きました。警官に聞いても、太平橋¹³は宣内¹⁴にしかない、宣外には別の橋しかないと言うし、結局どの橋なのか私にもわからない。そこで宣内の太平橋に行き、25号は見つかりました。でも周という家はなかった。どんな名前の家もなく、米屋が一軒あるだけ。そこで、私の昔住んでいたところ¹⁵へ行ってみました。そこはもうアパートに変わっていました。それから胡という昔の友人を訪ねてみましたが、門番は胡さんはもういらっしませんと言う、たぶん結婚したということだと思います。

北平の土埃は私の目をくらませてしまったみたいで、本当にうんざり、いつもの脱力感にたちまち襲われました。

そこで李鏡之¹⁶が7年前に勤めていた学校に行ってみました。本当に七年の月日がたった一日のよう、彼はまだそこに勤めていたの。小使が、彼の家は学校の近くだと教えてくれました。その時は本当に信じられなかった。彼の家に行ってみたら、子どもたちがたくさんいるの。そこで李潔吾¹⁷のこともわかりました。彼にも子どもが一人いました。夕飯は李潔吾の家で食べました。奥さんが作ってくれたうどんよ。食後に暫く話しました。私のことについて、結構知っていました。作品から知ったこともあるし、人づての話もあった。9時頃、胡同まで送ってくれ、人力車を呼んでくれたので一人で帰って休みました。まずまずね、結局知り合いがいたから。

明日彼らが家を探してくれるって。旅館は長く住めないから。明日には決まると思う。

それからもう一度宣外に行って何とか橋を探してみます。たぶんあなたが住所を間違えたのよ。そうでなきゃ見つからないはずがないわ。

食事や生活が無事でありますように。

珂¹⁸もね。

榮子 4月25日夜1時

紅-2:1937年4月27日(三十七)

均¹⁹:

一昨日の午後潔吾の家に引っ越しました。私が一間占領しています。二、三日のうちに北辰宮に移ります。ここでは一人で部屋を探すのが難しいし、なかなかすぐには見つからない。北辰宮はアパートで、割合豪華で、家賃も月24元か30元くらい、空き部屋がないのでひとまず何日か待つことにしました。一昨日は部屋のことでも気をもみました。あれこれ考えてようやく決めたの、そこにしよう、って!何かを成し遂げるためには少くらの代価はかかるものでしょう。

今彼ら夫婦は出かけていて、庭で子どもの面倒を見てあげています。庭の真ん中には梨の木が二本植わっていて、ちょうど白い花が咲いています。公園とか北海²⁰とかは、まだ行っていません。何日か家にいて彼らとよもやま話をしたけれど、彼ら夫婦もお互いに苦しみを抱えていることがわかりました。本当におかしいわね、どこの家もこんな。これって本当に狂った社会だわ。おかしかったのは、私がまるで一番上の兄さんみたいに彼らに道理を説いたこと²¹。

淑奇²²は最近来た?あなたの気分はどう?珂の件²³は決まった?はじめ航空便で出そうと思っただけけれど、本局がとても遠くて。きっと手紙を待ちかねているでしょうね。

『八月』と『生』²⁴は、こっちではとっくに買えなくなっています。どうしてか分からないけれど、複製本もないの。それぞれ何冊か送ってくれないか。友達にあげたいので。潔吾は私たちの生活については、作品を読んで知っていたわ。私たちの書いたものはほとんど読んでみたい。「大連丸」²⁵までも読んでいて、いつもあなたがどんな人が想像していたって。写真が見られるようになってからは何度も見たらしい。彼は、あなたがすごい人物だと言っていたわよ。それに肝が据わっているって。私もそれを聞いて嬉しかったわ²⁶。『第三代』²⁷からそれが見て取れるって言っていました。

こっちに来て四、五日になるけれど、まだ落ち着かない。落ち着き先が決まれば好くなると思います。

お酒はどのくらい飲んでる?

私は私の部屋が心配、鉢に水をやってくれたかしら?

昨日の夜北辰宮に引っ越しました。部屋はそれほど好くないわ。月24元です。

住んでみれば、五日か六日は我慢できる。その間に自分で個人の貸間²⁸を探してみます。

今日はもう一週間になるけど、まだ落ち着けないでいます。人という生き物は本当に困ったものね。

周さんの家には暫く行かないことにします。あなたの手紙が来てからにするわ。

手紙は北平東城北池子頭条7号李家²⁹に送ってくれればいいわ。

あなたのあの作品、もうできたの³⁰?

榮子 4月27日

軍 - 1 : 1937年5月2日

吟 :

前後して二通受け取りました。君は路地の番号を間違えたね、256号なのに257と書いている。間違っていたけれど届きました³¹。

今朝、鹿地夫婦³²が来て、僕たちのために文章を校正してくれた。文章はもう書いたよ、大体6000字だ。昨晚彼は4分の3は訳し終えたようだった。明日の朝彼らの所へ行って（彼らはもう環龍路³³に引越してきた）再校すれば送ることができる。女性作家については、君と白朗だけを挙げておいた³⁴。

秀珂は元気だ。毎日ここにやってきて、ずいぶん長いこといる。彼は何に対してもとても強い興味を示しているが、これはいいことだ。江西だが、もう行かせたくないと思っている³⁵。将来は多分上海に留まるか北平に行くかするだろう。奇³⁶は一度来て、君の最初の手紙を読んだよ。今日、電車ではったり彼女と明、それからおばあさん³⁷に会った。一緒に兆豊公園³⁸に行くところだった。おばあさんが何日かしたら漢口³⁹に行かなきゃならないからね。

30日の夕飯は虹⁴⁰たちの家で食べた。唐や金、白薇⁴¹（彼女は近々北平に病気の治療に行くので、君の住所を聞いてきたが、まだよくわからないと答えておいた）もいた。春餅を食べた。僕が入っていくと、虹が僕の手をぎゅっと握ったが、これは多分和解の印⁴²だと思う！12時になってようやく暇乞いをした。

福履里路と並行する北側の道を、歌を歌いながら帰ってきた。小雨が降っていた。

昨日の夜、僕は歌いながら帰ってきたんだ。

——一人小雨の降る大通りを。

繰り返し、繰り返し、また繰り返し……

全部同じ曲だ：

「僕の心は欠けている……」

僕は泣きたかったんだ！……

でも夜は更けていたし、誰かを驚かせてもいいけないと思って、

だからやっぱり歌いながら帰ってきた：

「僕の心は欠けている！……」

僕はかつて僕を愛した人の薄情なことを恨まない、

自分の恋心を恨むだけだ！

吟、これは僕が作った詩だ。君はただの「詩」だと思って読んでくれ、怒ることもないし、心を揺さぶられることもない。

君を送って帰った夜、その途中で珂と排骨麵を食べた。帰ってから日記に次のような言葉を書き付けた。

「今は夜中の1時10分。

彼女は行ってしまった！彼女を送って帰ってみると、ぽっかり穴の空いたベッド、泣きたかったけれど、涙は出ない。世界で彼女だけが、心底僕を愛してくれている人だということを、僕は知っている。でも、彼女は行ってしまった！……」

吟、この手紙を受け取っても、心配しないでくれ。今はもうずっと落ち着いている。でもこの数日の間、ひたすら耐えていたんだ！今はもうわかった、苦しみを受け止め、それを処理し、消滅させ……。酒はもう飲まない（胃の調子が悪し、鼻も炎症がひどい）。僕の小さなベッドの脇には小さな酒瓶が並んでいて、うち二本にはまだ酒が残っているけれど、もうそれには手を出さない。僕はどのように自分自身を破壊しようとするのか？僕はこれを肝に銘じて、酒の誘惑に抵抗するんだ！

僕もたまたま何本かたばこを吸ったよ。

周の居場所がわからなければ探さなくていい。潔吾がいれば、きっと君のあらゆる面を手助けしてくれるだろうから、より安心だ。安心して創作すればいい。焦らずに。僕は僕の予定で上海を離れる。僕が行ってしまったら、珂は今よりもっとひとりぼっちになってしまう。君が出発した次の日の朝、一人の日本の女性エスペランティストが君を訪ねてきた。もう一人男がいた（日本から戻ったばかりの東北の人間だ⁴³）。楽⁴⁴が書いた紹介状を持っていた。住所は下の階の段という人が教えた。今この住所を知っている人は恐らくかなりいる⁴⁵。だが勝手にさせればいい。

《日本評論》（5月号）に僕についての文章が載っている⁴⁶から、日本の本屋に行って見てみるといい（小田嶽夫著）。

鉢は、君が出かけてから毎日水をやっていたが、ここ何日か忘れていたので、しおれてしまった⁴⁷。今日また水をやり、今はドアのそばの小さな棚の上に置いて日に当てている。小さな家は何の感慨もないが、人ってものはちょっと離れてみると、すべてが目新しく感じられるものだね。

僕は時々鹿地の所にも行くし、許⁴⁸の所にも行く。映画も見ると、もう何日かしたら仕事をしようと思っている。

夏はやっぱり一緒に青島に行こう。

暇があったら奇と珂にもちょっと手紙を書いてくれ、彼らをがっかりさせないために。

今日は日曜日だ。やっと雨が上がって太陽が出た。

君が知りたいだろうことは全部書いた。この手紙、航空便にしようと思ったが、今日は日曜日なのでやっぱり普通便にする。

君が新たな喜びを得られますように。

君の弱虫熊⁴⁹ 5月2日

紅-3：1937年5月3日（三十八）

軍：

昨日見た映画、「椿姫」⁵⁰、まあまあだった。今日は東安市場⁵¹で食事してから、帰って一眠り

しました。今午後6時です。この手紙を書く前は、『海上述林』⁵²を読んでいた。素晴らしいわ、とてもおもしろい。

でも気持ち的には日本にいた時とあまり変わらない。知り合いが二人いても、やっぱりおんなじ。

仕事をすべきよね。仕事を始めれば、すべて充実するわ。

あなたはお酒を飲んでダメ。お酒は肝臓を痛めるんですって。もし肝臓病になったらなかなか治らないらしいわ。肝気病⁵³ってことよ。

北平は食べ物はおいしいけれど一人で食べても味気ない。だからいい加減になってしまう。

あなたは絶対手紙をよこさなければだめよ。あなたの手紙を見ないと何かあったような気がする。早く手紙をちょうだい！

珂によろしく！

奇によろしく！

あなたも元気で！

榮子 5月3日

住所：北平東城北池子頭条7号 李方

紅-4：1937年5月4日（三十九）

軍：

昨日また一通書きました。私の手紙、どうしてこんなに遅いのかといつも思っています。そうでなければこの何日かあなたの様子が知れないなんてことはないのに。本当は私がせっかちで、郵便が届くのに必要な日数を考えられないからです。

この手紙も入れれば4通目です。あの時は本当に違う場所に行ったために慌てていたんだわ。そうでなければ番地を間違えるはずはないもの。昨日出した手紙も、その番地を書いたけど、届くかしら⁵⁴。

私は手紙に辛いことは書かないし、口にするのもできるだけ楽しいこと。でも私の心は毒に浸されたように暗い、ずっと浸されればなしだから、溺れ死ぬかも知れない⁵⁵。でもそうでないことはわかっています。私は始終自分を批判している。でもこの感情は批判しきれない。暑い夏がいつまでも続くことはなく、暑さが過ぎれば秋の涼しさが来ることを知っています。でもわかっているのに、ちゃんとできない。喉が渴いているちょうどその瞬間、喉が渴いているというその真理は世界の一番崇高な真理だわ。

そんな具合だから、あなたはやっぱり引っ越した方がいいと思う。

珂のことだけど、私は江西に行けるのであれば、やっぱりそうするのがいいと思います⁵⁶。私たちの生活も安定していないし、彼も私たちについてうろうろするより、安定した時期を過ごさせた方がいいと思う。冬になって私たちが落ち着いたら、彼に来させたらいい。若い内は少しくらい苦労した方がいい、苦労を後回しにするよりはまし。

昨日また周さんの家を捜しに行きました。今度は宣武門外の橋、達智橋に行き、25号は見つかりましたが、何と何と、ここもお米屋さん。住んでいる人はいませんでした⁵⁷。

ここ何日か夜怖くなる病気がぶり返しています。しかも夢の中でしょっちゅう死ということが浮かんできます。

苦しい人生です！毒を飲んだような人生です！

私はいつも自分が我慢しきれなくなるんじゃないかと思っています。私の神経は糸よりも細いのかしら。

自分のためにこのような考えをどれほど避けようとしたことか。でも今経験していることよりもっとすごいことがあるのかしら。今経験している最中です。

泣こうとしても泣けない。泣くことが許されない。泣く自由を失ってしまいました。私はどうして自分をそうしてしまうのかわからない。心まで自分に枷をかけてしまう。

この気持ちは日本に行った時の気持ちとは比べられません。何が私を救えるのかしら！神様！何が私を救えるのですか！私はきっとかつて自分自身を作り上げてきたその手で、自身を打ち砕いてしまうのだわ。

お元気で。

榮子 5月4日

私たちの本の中に

精装本があったらそれぞれ一冊送って下さい。

軍-2：1937年5月6日

吟：

今日は君の手紙が来るような気がしていたが、やっぱり家に入るとドアの脇の鏡台のところに手紙が一通立っていた。僕宛のだ。

ほとんど習慣になっているんだ。戻った時と出かける時、入り口の郵便受けを開けて見ずにはいられない。手紙をそこに入れないことはよくわかっているし、既に手紙が来ていても、やっぱり開けずにはいられない！……明らかに自分宛の手紙でないかわかっていても、手に取って眺めてしまう。

今午後2時35分だ。許の所から帰ってきたところだ。このところようやく晴れたのに、今日はまた雨になった。一足しかない靴と新しい服が濡れるのが嫌だったので、車に乗った。ここに越してから車で家に帰ったのは初めてだ。

許は三冊本を出したいと思っていて⁵⁸、僕がある印刷所を紹介した。僕が一回校正をやって、清書も少しやった。今日は珂を紹介した。彼は今むこうで清書しているよ。

珂の「エスペラント」は一段落ということだ。あの新聞社はまだ少しの希望があるようだが、もし彼が上海にいたくないようなら、北平に行ったらいいと思う。九江⁵⁹は行く必要はないと思う。あれは彼には合っていない。今まだ決めていないけれど。

奇たちは元気だ。民はもう劇団に入ったよ。彼は既に役（欽差大臣の中の商人組合会長）をもらっていて、満足しているようだ。金⁶⁰はもう彼らのところに引っ越して、黒⁶¹が住んでいたあの部屋にいる。昨夜の晩飯はそこで食べたうどんだ。おばあさんはその日の夜漢口に行き、莉⁶²は仕事を辞めた。黒も北平に行った。

前の手紙で言ったように、もう酒は飲まない。今も飲んでいないよ。あの残った酒はまだそこに並べてあるが、そいつにはもう何の興味もない。今は時々たばこを吸う。たばこを吸っていると落ち着くんだ。

気持ちは何日か前のように鬱々としてはいない！このところ何も仕事をしていないけれど、仕事をしたいという欲望はある。それがいつもいつも僕を突き動かしている。でもそれを青島に行くまで保留しておくんだ。今は何もしたくない。

数日来気力のすべてを読書に注入している。トルストイの「アンナ・カレーニナ」を読んでいるところだが、本当に素晴らしい作品だ。すっかり魅了されている！小説中のヴロンスキーは、僕のことを書いているようだ。僕は彼ほどいい男ではないけれど⁶³。

僕はもう自分を律する方法を見つけたよ。朝目覚めたら（この時があらゆる思いの始まりで、そいつが一日の安寧をかき乱すのだ）すぐこう言う。「僕は健康でなければならない、愉しくなければならない、安らかでなければならない。僕は生活していかなければならない。僕は仕事をしていかなければならない……」。それからグズグズせずに起き出して、これまで欠かしたことのない室内運動に戻る。終わったら洗顔、それから公園に行く（恐らく8時か8時半頃）。池の端に新しく茶館ができたので、紅茶を一杯飲み、干しぶどうを一袋食べるかもしれない。それから読書をしたりメモを取ったりする。大きな声を上げて走り回る子供たちを見ていることもある……12時までずっとこうやって過ごしてから、昼飯を食べに行く。食後は戻って昼寝をすることもあるし、事務的な処理をすることもある。寝る前には冷水摩擦をし、それからまた12時まで本を読む。そしてまたこう言う。

「僕は健康でなければならない、愉しくなければならない、安らかでなければならない。僕は生活していかなければならない……」。そして眠る。もちろん、君のことを思う時もある……例のギター⁶⁴を弾くこともある。自分が歌える歌を口ずさむ。ギターを弾く時はもうあの今までのやり方（鉄を使って、目の見えない人みたいにまさぐるやり方⁶⁵）はせず、今は指で弦を押さえるようにしている。

こうやって一日波風なく過ごしている！……もちろん、何かを考えなければならない時は徹底的に考える。自分の想像力がこれ以上考えたくないと言っても、しつこく考えさせる！……本当にへとへとになるまで止めない。それは抑えつけるべきではないとわかっているから。抑えつけるのはよくない。例えば一頭の馬が走りたいと思うなら、好きなように走らせればいい。力尽きればそのまま止まるのだから。僕の今の気持ちは最悪だけれど、僕たちはこういったことを大事にしなければならない。それは僕たち芸術に関わる人間に貴重な貢献を与えてくれるのだから。僕たちは人類の心理の変化の真実の歩みをここから理解できるはずだ！君もこの機会にそれをちゃんと分析して欲しいと思う。それを受け入れ、それが与えてくれるものを自分のものにする、そういったことをその時どきに記録しておく。これは役に立つよ。

恐らく7月10日以前にここを離れることができると思う。もう二カ月もない。また会えるんだ。気をつけることは、今は落ち着いてちゃんと仕事をする。今度僕が君の成績をチェックするよ。

この二カ月、僕は許を手伝って記念の本とあの三冊⁶⁶を終わらせて、もう少し本を読むから、何の成績も残せないかもしれない。

僕も静かに大きなベッドに横になり（もう小さなベッドは使っていない）、ガラス越しに窓の外空やつげの木を見ることがある。そうすると葉がそよ風に震えるのを見ているだけで、気持ちが安らかになる。最近新聞に、女性は毎日一時間「空を見る」と、一週間たつと赤ん坊のように美しくなるって誰かが書いていた！僕は美しくなりたいとは思わないが、心が落ち着き、安らかになる気がする。君もやってみるといい。毎日朝と晩に、僕が言ったようにしてごらん。これは心理療法で、迷信とかいい加減な話じゃない。

一通の手紙に原稿用紙五枚近く使ってしまった。これをもし文章として投稿したら、恐らく6元にはなるね！

便箋はまだあるが、僕はそれを使いたくない、原稿用紙が好きなんだ。これは習慣だね。

君は長編か「印象記」を考えればいいよ。二カ月のうちには少し書けるだろう。もしチャンスがあれば、どこかで每日一、二時間運動するといいい。テニスをするとか。運動は確実に寂寞を治療してくれる。

この手紙はベッドの脇の小さな丸い机で書いている。ここの窓をちょっと開けると、外に面した部屋より涼しいんだ。

やはりちょっといい部屋を借りて、雇い人を一人置けば、ちょっとはいいんじゃないか。アパートに住むのはよくない。部屋が良かったとしても一年半か半年借りる契約をしなけりゃならない。二部屋多く借りても大丈夫だ、冬僕たちは北平で過ごすつもりなんだから。

あの頃は酒ばかり飲んでいたので肝臓がちょっと参ってしまったらしい。鼻も炎症がひどかったが、今はもう全部治った。

最後に君に言うておくことがある。今「タップダンス」⁶⁷を習っている。足を踏みならず、あのダンスだ。二カ月で卒業、全部で15元。マスターしたら、後で君に教えてあげるよ。

上海で何か買いたいものがある？

あったら書いてくれ。

君の弱虫熊 5月6日午後3時45分

軍-3:1937年5月8日⁶⁸

お嬢ちゃん⁶⁹:

君の手紙を受け取って、返事を書こうとしていたら金人が来たので遅くなってしまった。君の三通目の手紙も受け取った。僕の君宛の手紙（二通目）も今日には着くんじゃなかな⁷⁰。この手紙を見たら——君の気持ちが少しい方に向かうんじゃないかと思う。

二日前に送った四冊、受け取った？今君が欲しいと言っている本⁷¹は明日か明後日送るよ。

僕は今『十月十五日』⁷²の校正をしているところだが、今夜のうちにほとんど終わるはずだ。夕飯を食べたら映画「無国遊民」⁷³を見に行くつもりだ。

君は自分を責め続ける必要はない、そんなことは役に立たない。自然に消えていくのに任せることだ。君が言うように、暑さが過ぎれば秋の涼しさが来る⁷⁴。今僕はもう秋の状態だ。だが僕は冬になってしまうことが心配だ。冬のあとには春が来るけれど……

家だが、引っ越すことは考えていない。ここが割合に居心地がいいからね。

周は恐らく引っ越したのだろうから、もう探さなくていい。

寝る前に冷水摩擦をして、何か体を動かす方法を考えれば、君の恐れと不安はきっと薄れるはずだ。

どんな苦しみに対しても、君はその都度そいつに言ってやればいい。「来なさい！どんなに数が多くて重くても、お前を担いで行ってやるから！」君は決闘に向かう勇士のように、君の苦しみに向き合えばいい。恐れる必要はないし、弱気になる必要もない、それは恥だ！人生の最大の瀬戸際、それは死だ。死んだら何もかも全部解決する。だが僕たちはこの「死ぬ気」で生きていかなければならない！そうすればすべてがありきたりで泰然としたものになる。振り返って考えてみればいい。どれほどの波を僕たちはくぐり抜けてきたか。だから目の前にどれほど困難な波が来ても、同じようにくぐり抜けられる。将来僕たちはこれまでと同様にさげすんだ、誇らしげな微笑を浮かべて振り返ってそれらを見るだろう。——今は忍耐が必要だ。一歩下がって考えてごらん。もし今君を牢屋に閉じ込めたとする。ただただ長い夜、呼吸さえ自由ではない、そんな時君はどうする？死ぬか？それとも生きるか？僕はたくさんの人を見てきた。彼らは黒髪が白髪になっても、耐えて生き続けた、……

僕はここで自分の道理を述べるつもりはないからね。そうすれば君はまた僕が君のことを理解していないって言うだろう。教えてあげるよ、君は自尊心のとても強い人だ。君はまたこう言うだろうね。私の苦しみはみんなあなたが与えたものじゃない、とか……ここで逆に私に教えるの、とか……でも僕の苦しみは、どう説明する？僕はこう言うしかない。これは「自業自得」だ、自分で造った酒を自分で飲んだんだ……僕はもうこれらの原因を追求するつもりはない。

前の手紙に書いたけど、君はこの世界で僕を本当に理解し、僕を本当に愛してくれている人だ！そうだからこそ、僕自身の苦しみの根源でもある。また君の苦しみの根源でもある。だが僕たちは苦しみがずっと自分たちをさいなみ続けることを許してはおくことはできない。だからこそ様々な解決の方法を……探し、試さなきゃならない。探し、解決する途中では高度な忍耐が必要だ。そこで初めて挽回という結果を獲得出来る。そうでなければすべて破滅するしかない！君は恐らく破滅は忍耐に勝ると言うだろう。でも僕はそうは思わない。何事に対しても解決の方法を探すべきだ。それこそ人の責任だ、いわゆる理性の動物としての。でなければ目を閉じて何も見ようとせず、すべてから逃げ……結局、すべてに征服され、自身を破滅させることになる。すべてのことを詩人のロマンティックな感情で処理することはできない。それは一種の低能な、軟弱な態度だ！自尊心の強い人間は違う。

僕はいろいろな方法で自分の苦しみを軽減しようとしてきたが、今はかなり成功している。僕は君が「お手上げ」にならず、うまく操り、解決し、自分のすべてを把握しているような人であって欲しいと思っている。無力であってはダメだ！探せ、粘り強い探求力を！神経が過度に興奮し、上っ調子になって生活していけない。自分の感情を抑え、すべてに対して応戦する準備をするんだ！

僕の感情は君よりもかなり危険だが、僕はいつもそれを処理する方法を考えている。一時耐えがたくても、次第にそれを軌道に乗せて前進していく。

僕が人生の過程で出会った危害は、どうしても君より多い。でも僕は楽観している。随所で

様々な環境を利用して自分の力を高め、自分の知恵の糧にしてきた。つまり、僕は勇気と力で戦場に飛び込み、そこから抜け出してきた。だから人生における環境はどうやっても僕をねじ伏せられなかったんだ。君は僕の不器用さや合理性のなさを笑ったりするけれど、……こんなだから、僕は頑強に生きていけるのだ。

常に自分の欠点に注意しておくことは必要だし、自分の長所を育てることも必要だ。人には欠点がある。それを克服することに僕は賛成だ。もしその欠点が本当にその人の長所でないのならば。

医者が慰めばかり言うのは、病人にとってほとんど何にもならない。医者は少なくとも病人を治療し、彼が守るべき具体的な方法を示さなければならない。最後に一言言っておく。自尊心を病態化させて、僕の言ったことに対して反感を持たないで欲しい！

潔吾兄のところには別に手紙を出さないことにする。彼に伝えてくれ。冬か秋になったら会えるからと。

元気で！

君の弱虫熊 5月8日午後5時30分

紅-5：1937年5月9日（四十）

軍：

今日あなたの手紙を受け取り、急いで戻って返事を書いたのですが、投函しないままです。気分が良くないから、あなたが読んで良くないと思う。泣きながら書いたから。あなたの二通の手紙を見て、二回泣きました⁷⁵。

ここ数日やはり毎日李家に行っていますが、長居はしていません。

私は東安市場で食事をしますが、毎回20銭⁷⁶もしないのに、味はとてもいいです。羊肉麵は一杯10銭。それに花巻を二つ追加したり、野菜炒めを頼んだりします。全部でせいぜい20銭です。残念なのはこんなおいしい料理なのに、全部食べきれないこと、申し訳ない。

6日にも一通書きましたが、出していません。あなたの食生活は多分まだ前の通りだと思えます。ビスケットは買いましたか。果物をたくさん食べるようにね。

あなたの手紙に、毎日一時間空を見ると美人になるって書いてあったけれど⁷⁷、それは無理だわ。口に出すと悲しくなる。私は小さい頃から空を見るのは好きだし、今になるまでずっと好きだけれど、でも私は美人にはなっていない。本当だとしても、私はどうして苦勞するの。だから、美人はもともと美人なのよ。（そんな話は冗談でございます）。

奇は頼りにならない。黒人⁷⁸は李家に私を訪ねてきました。これは彼女の言いつけです。李夫人と私と三人で、北海公園に行きました。上海を離れてもう半月あまりね。気持ちはまだこんがらかっている。敗北の道を歩いているんだわ。でもこれ以上は言いたくありません。

「海上述林」は読み終わりました。「アンナ・カレーニナ」を送ってくれたら読むわ。それから「氷島の漁夫」⁷⁹、「獵人日記」⁸⁰も。これは届いたら潔吾に読ませてあげるわ。書留にしないでいいです。もし読んだ方がいい本があればその都度送ってください。李家に置いておけばなくなる

ことはない。上海を離れる時にも便利だから。

私の長編はまだプランができていません⁸¹。でも今は「恋愛のために人々を忘れるなんて、女丸出し！自分勝手！」だなんて自分を責めすぎないようにしています。以前もそう思っていました。でも今はダメ。男性が愛する価値のない女性のために人々を忘れるどころか、命まで忘れてしまうのを見てしまったから。私はまだ命を忘れてはいないのに、命を忘れるのも価値があるのかしら。人生の途上で、ある時期私の足跡のそばに彼の足跡もあった。(何とか二つの魂が琴の二本の弦のように互いに響き合っていた)⁸²。(この言葉はちょっと背伸びしているの、消します)⁸³。

筆も墨も買いました。書を書くつもりです。でも部屋はあるにはあるのだけれど、他の人と同じ敷地なのはちょっと。契約については、あなたが来てからにします！

お元気で。神様があなたに健康をくださいますように！

榮子 5月9日

紅-6:1937年5月11日(四十一)⁸⁴

軍:

今朝一通書いたのですが、また投函しなかったわ。

気分がとても悪いので、書を一枚書いたのだけど、それも下手。ちゃんと書けたらあなたに作品として送るわ。

ルソーの『懺悔録』⁸⁵はもうじき読み終わります。結局女性に関する物語ばかりね。

潔吾の家には私も長居したくない。重苦しい家庭なの。

私が今住んでいる部屋はとても高いです。個人の所を借りたいけれど、それも面倒だしね。

やっぱりあなたは引っ越した方がいいと思う。住み慣れた場所にずっといるのはあまり良くないわ。

昨日の午後、とても手持ち無沙汰だったので、北海に飛んで行って二時間いました。女性って本当に不便ね。公園に行っても人にじろじろ見られて、とても窮屈。

今日は暑いので、一眠りしました。

レストランから出てきて、もう少しで転ぶところだった。なぜかわからないけれど、毒を飲んだような感じがして。一眠りしたら良くなりました。

あなたは果物をもっと食べなさい。きっと野菜が少ないのだから。

お元気で。

榮子 5月11日

軍－４：1937年5月12日

吟：

手紙受け取りました。ここ何日かあまりよく眠れない、また以前の病気が出たんじゃないかと思う。もし君がそうしたいなら、手紙を読んだら支度をして上海に来なさい⁸⁶。6月になったら二人でまた青島に行こう。また近々。

本当は電報を打とうと思ったのだが、驚くといけないと思って、やっぱり手紙にしました。

軍 5月12日夜

本などはいらない、暫く潔吾の所に置いてもらえばいい⁸⁷。

紅－７：1937年5月15日（四十二）⁸⁸

軍：

一昨日長城⁸⁹に遊びに行ってきました。黒人も一緒に行きました。本当に雄大、山々は海よりもっと強く人の魂を揺さぶる。日暮れ時には強い風が吹いたのだけれど、その音はまるで海の音のようだった。『弔古戦場文』⁹⁰にいう、「風悲しく日くらく、群山糾紛す」というのは、まさにこんな景色ね。

夜の11時に戻りましたが、もうくたくた。長城に行く前の晩黒人と一緒に芝居を見に行ったし。彼のアパートの門限がとても早いので、私のところの床に寝たし。規則正しい生活に慣れていたからとても困って、だから一晩中眠れませんでした。

あなたが送ってくれた本、昨日受け取りました。前後して二回、最初は四冊、次に六冊⁹¹。

あなたの手紙も皆届きました。最後の忠告の手紙も受け取りました⁹²。

私は大賛成です。あなたの言葉には道理があるわ。私はその通りにやらなきゃね。

お元気で。

榮子 5月15日

奇には特に書きません。長城で摘んだ花を入れるから、彼女にいくつか分けてあげて。

- 1 1981年1月、黒龍江人民出版社。
- 2 「上」は『日本女子大学文学部紀要』第66号（2017年3月）に、「下」は同第67号（2018年3月）に掲載されている。
- 3 『蕭軍紀念集』1990年、春風文芸出版社。
- 4 注66参照。
- 5 平石「東京から——蕭紅書簡 翻訳と注釈（上・下）」を併せて参照されたい。注55参照。
- 6 蕭軍『蕭紅書簡輯存注釈録』では「第三十六信」。以後、「紅－１」は蕭紅の北京からの第一信であることを、「軍－１」は蕭軍の上海からの第一信を表す。また『注釈録』の蕭紅書簡に振られた番号

を日付の後に（ ）で付す。

- 7 1912年に完成した済南市北部の濰口黄河鉄路大橋であろう。2018年に中国工業遺産保護建築物に認定されている。
- 8 ここでいう「東北軍」は、「国民革命軍東北辺防軍」である。辺防軍総司令の張学良は、この軍隊を率い、1936年12月12日西安事変を起こしている。蕭紅が見たのは、西安から引き揚げてきた東北辺防軍の姿だったのだろう。
- 9 天津と南京浦口を結ぶ、津浦鉄路の意。
- 10 鉄道の南側の、現在の唐官小区のことだろうか。
- 11 周香谷。蕭軍の東北講武堂時代の友人。「当時彼は彼の奥さんの母親の家に住んでいた。前回北京に行った時彼に会っていたからだ。彼ら夫婦は前門外の『岳陽楼』で私に焼き肉をごちそうしてくれた。彼は宣外に住んでいたのだろうか、それとも前門外だったのだろうか。……地名も『三眼井』だったか『四眼井』だったか。私は蕭紅に、彼を訪ねるように言ったのだ。彼は『北京っ子』だったから、彼女が家を探したりするのに助かると思ったのだが、結局見つからなかった。／周の奥さんの母親は有名な京劇の票友、恩曉峰で、その娘も京劇俳優である」（蕭軍の本書簡に関する注：以後「紅-1注」と表記する）。「票友」は辞書によれば「素人役者」の意である。
- 12 宣武門是北京の内城九門の一つで、故宮の南西に位置する。「宣外」はその門の外側、「宣内」は内側を指す。地図参照。
- 13 地図参照。
- 14 注12参照。
- 15 蕭紅の従兄陸振舜の哈爾濱三育中学時代の友人李潔吾に「蕭紅在北京的時候」（『哈爾濱文芸』6、1981年）があるが、それによれば当時燕京大学の学生だった李潔吾が、1930年9月頃、帰省先の哈爾濱から北京に戻ってみると、蕭紅は中国大学に入学した陸振舜について既に北京に来ており、師範大学女子附属中学に入学していた。最初は現在の民族文化宮の裏のアパートに住んだが、しばらくして二人の学校に近い二龍坑の小さな一戸建てに引っ越したという。

蕭紅が入学したとされる師範大学附属女子中学は、1917年北京女子師範学校附属女子中学として設立され、1924年北京女子師範大学附属中学に、1931年北京師範大学附属女子中学と改名しており、現在は北京師範大学付属実験中学として開校されている。現在の所在地は北京市西城区二龍路である。

陸振舜の通った中国大学は、孫文によって1917年に設立され、宋教仁、黄興といった人物が校長を務めた。1949年に閉校となったが、哈爾濱の満洲省委員会で活動した李兆麟の出身校でもある。この学校も、西単二龍坑鄭王府にあった。地図参照。
- 16 「私は会ったことがない」と蕭軍は言っている（紅-1注）。
- 17 注15参照。蕭軍は彼に会ったことはないが、話はよく蕭紅から聞いていたという。蕭軍によれば、当時彼は北京の小学校の教員で、恐らく中国共産党の地下黨員であった（紅-1注）。
- 18 蕭紅の同腹の弟、張秀珂。この時蕭軍のところに寄寓していた。手紙では「珂」と言ったり「秀珂」と言ったりしている（「東京から——蕭紅書簡（下）」注52参照。以後「（下）注52」と表記する）。
- 19 蕭軍のこと。東京からの手紙ではほかに「軍」、「三郎」などが使われている（（上）注6）。
- 20 「北海」は故宮の北西側にある「北海公園」のこと。地図参照。
- 21 蕭軍はこの手紙の注で、「現実の苦しい世界において、苦しみのない者がいるだろうか」と書き、さらにこのようにいう。「普通の友人の目には、我々夫婦は『これ以上ないお似合いの』組み合わせに見えただろう。貧しい以外は、幸せな。我々も、普通の夫婦と比べれば、確かに幸せだと思っていたが、やはりそれぞれにそれぞれの苦しみはあるのだ」。
- 22 哈爾濱時代の友人の袁時潔。（下）注35参照。
- 23 蕭紅は5月4日の手紙（紅-4）で弟を江西に行かせたいといい、蕭軍は5月2日の手紙（軍-1）

で江西行きに反対している。九江に行く件であったことが蕭軍の5月6日の手紙(軍-2)でわかるが、彼はその中で再度江西行きに反対している。具体的な仕事(要件)が何であったのかは不明である。

- 24 蕭軍「八月的鄉村」(1935年7月)、蕭紅「生死場」(1935年12月)のこと。共に魯迅の尽力により、奴隸社より奴隸叢書として上海で出版され、二人の作家としての地位を確立させた。
- 25 蕭軍「大連丸上」(1935年5月2日、初出は『海燕』、『緑葉底故事』(1936年12月、上海文化生活出版社)所収)のこと。蕭軍、蕭紅の二人が日本の貨物船大連丸で東北を脱出した時のことを題材としている。
- 26 この一文について、蕭軍は次のように書いている(紅-2注)。

しかし彼女が心から私のこの「すごく」で「胆がすわっている」という人となりを評価していなかったことを、私は知っている。また私も彼女の感じやすく傷つきやすい、プライドが高く、自ら孤高をもって任じ自己陶醉する、弱々しい人となりが好きではなかった。これは歴史の過ちだ！歴史も実証している。遂にそれぞれの道を行くこととなり、それぞれがそれぞれの求める人を探しに行くことになった！／私は史湘雲や龍三姐のような人が好きだ。林黛玉や妙玉、薛宝釵は好きではない。

史湘雲、龍三姐、林黛玉、妙玉、薛宝釵はいずれも「紅樓夢」の登場人物。史湘雲、龍三姐はいずれも活発で、自分の意思がはっきりしている女性。林黛玉、妙玉、薛宝釵はその対極にある女性。

- 27 蕭軍の自伝的長編。第一部は『作家』一卷三期～六期(1936年6月～9月)、第二部が『作家』二巻一期～(1936年10月～)に連載され、それぞれ1937年2月と3月に上海文化生活出版社から出版されている。
- 28 原文は「民房」。
- 29 地図参照。
- 30 蕭軍は「その頃日本の刊行物に何か書いていたが、名前は忘れてしまった」(紅-2注)と言っているが、恐らく5月2日の手紙(軍-1)で言及している文章のことであろう。注32参照。
- 31 当時蕭軍は「フランス租界呂班路256弄」に住んでいた(軍-1注)。
- 32 鹿地亘と池田幸子。鹿地は1934年に治安維持法違反で逮捕、1935年11月に釈放され、翌年、中国に渡っている。池田とは上海で知り合ったと言っている。池田は中国で生まれ、日本で女学校を出た後、学生運動で逮捕され、明治大学を追われて上海に渡ったようである(鹿地亘『中国の十年』1948年、時事通信社)。「鹿地は当時日本の『文芸』に中国文芸界の状況について書くよう、自分を紹介してくれていた」(軍-1注)。この文章は「蕭軍より中野重治に」と題して『改造』1937年6月号に掲載された。蕭軍の「1937.5.1日、降雨の日、上海にて」という日付がある。これに答える形で『改造』の同月号に中野重治による「中野重治より蕭軍へ」(37年6月3日)が掲載されている。蕭軍がこの文章を書くようになったいきさつについては、「蕭軍より中野重治に」に次のように書かれている。

一昨日手紙を書かうと思ったので、鹿地(亘)君の処に往ったところ、彼は紙上に私に書いてくれました――

「『文藝』が中国作家に何か日本文学と中国文学とに関する談話を、通信の形式で、書いてもらって掲載することを望んでるので、君少し書いてくれないか？」

「でも駄目だ、私には書けないかも知れない。書けるかどうか、私は月末までに君に通知しよう。」

彼は中国文は読めるけれども、中国語を一句も話せません。私もごく僅かの間日本文を学んだ

ことはあるが、然し矢張り彼と同様なのです。そこで彼の夫人の池田女士の通訳による外なく、時に訳せない場合は、我々は、筆談する外ありませんでした。談話は次第もなく系統もなかったが、開始は多分彼が私にかう話してくれたことからでした——先日中国にやって来た日本の作家の小田嶽夫君が、「最近の支那芸術界の報告」といふ一篇を、五月号の『日本評論』に載せてある。その中の一節に私に談じ及んでゐる、と言って彼はかう話しました——「日本のある雑誌では、君のことを『中国のShorohoff』と言ってるよ。」

そして「去年一年中の新人」として荒煤、羅烽、舒群、端木蕻良を挙げ、「女流作家」として「蕭紅など比較的多く産出した一人と言へるでせう。その外には白朗などが、文章を発表してから間もないので沢山ではないが、新しい展開を彼らの前途に期待されるでせう」と書いている。「中国のShorohoff」と言われたことがよほど嬉しかったのだろう。軍-1（5月2日）で蕭紅に小田の文を探して読むよう、促している。

白朗は哈爾濱からの友人で女性作家。1935年夏、逮捕されていた夫の羅烽が釈放されてすぐ、東北を脱出し、蕭軍、蕭紅を頼って上海に来ていた。（下）注28参照。

33 環龍路は現在の南昌路で、かつてのフランス公園（現在の復興公園）の北側である（木之内誠『上海歴史ガイドマップ 増補改訂版』2011年、大修館書店）。

34 注32参照。

35 注23参照。

36 淑奇のこと。注22参照。

37 「彼女」は淑奇、「明」はその夫の黄之明。「おばあさん」は羅烽の母親だと蕭軍の説明がある。（軍-1注）。

38 1914年に西洋人の個人庭園の一部を工部局が買い取って開放した公園で、ジェスフィールド公園とも呼ばれた。1928年に中国人にも開放されたという。現在は中山公園（『上海歴史ガイドマップ 増補改訂版』）。

39 武漢市は長江を挟み、東側の武昌と西側の漢口に分かれている。日中戦争が始まり上海が陥落すると、蕭軍・蕭紅を含む多くの文学関係者が武漢に避難した。羅烽、白朗夫婦は1939年に武漢で中華全国文芸抗敵協会によって結成された作家戦地訪問団に揃って参加しているが、その際、幼い息子を武漢の羅烽の母親に預けている（白朗「戦地日記（我們十四個）」：『白朗文集 二』1985年、春風文芸出版社）。

40 羅烽のこと。軍-1注によれば、上海に来てから見解の相違が生じ、一次は「絶交」状態となったが、このときは他の友人たちと一緒に彼の家で夕食を食べた、これは「和解した」ということだ、と書いている。

41 「唐は唐豪、字を范生と言って、当時は弁護士をしていた。私の友人だ。（既に故人となった）。金は金人で、哈爾濱時代の友人。当時は上海でロシア語の翻訳をしていた。（既に故人である）。白薇は女性作家である」（軍-1注）。

上海時代、蕭軍と蕭紅の二人は何度か引っ越しをしているが、1935年5月、薩坡塞路190号（現在の淡水路266号）の弁護士事務所の二階に引っ越した。この弁護士が唐豪である（丁言昭「蕭紅在上海事跡考」：『東北現代文学史料』4（1982年3月、黒龍江省社会科学院文学研究所））。

金人は河北省出身だが17歳の時哈爾濱に来てロシア語を学び、1937年上海に出る。当時上海で作家として活躍を始めた蕭軍は東北の友人たちの力になりたいと思い、金人に対して「ロシア文学を翻訳すれば自分が出版社を探す」と豪語し、魯迅にたしなめられている（蕭軍『魯迅給蕭軍蕭紅信簡注釈録』（1981年、黒龍江人民出版社）所収の魯迅第十五信注）。その後金人は魯迅の紹介で『訳文』などに翻訳を発表するようになり、ロシア文学翻訳者として名を成す。

42 注40参照。

- 43 日本人エスペランティストの緑川英子（長谷川テル、1912～47）と夫の劉仁だろうか。劉仁は遼寧省本溪出身で、東京高等師範学校に満洲国留学生として在籍しており、やはりエスペラントを学んでいた。緑川は1937年4月15日、先に帰国した劉仁を追って上海に到着し、半年暮らした後、同年11月26日、杭州へ出発している（『嵐の中のささやき』高杉一郎訳、1980年、新評論）。
- 44 「楽”は“泉家暄”につながる人で、当時上海『エスペラント協会』の主催者だった。（既に故人である）（軍－1注）。「泉家暄」については不明。
- 45 「当時一般的な左翼文化工作者は住所を公開していなかった。国民党特務の搜索を逃れるためだ」（軍－1注）。
- 46 蕭軍は内容を覚えていないと言っている（軍－1注）が、蕭軍を「中国のShorohoff」と呼んだ小田嶽夫の「最近の支那芸術界の報告」のことである。注32参照。
- 47 紅－2（4月27日）では置いてきた鉢植えのことを心配している。
- 48 魯迅夫人許広平。蕭軍は魯迅の死後、許広平の、魯迅の文集を整理し、刊行する作業を手伝っていた。
- 49 原文は“你的小狗熊”。“狗熊”は「ツキノワグマ」などを指すが、一方で「弱虫、意気地無し」という比喩の意味も持つため、ここではこのように訳した。蕭軍自身は注で、“狗熊”は蕭紅が彼に付けたあだ名だという。「私が不器用でがっちりしていて、彼女のようなキビキビしたところがないからだ。私は彼女を“小麻雀”と呼んだ。彼女の足が細く、歩く時にびよんびよん跳ねるからだ」（軍－2注）。
- 50 アレクサンドル・デュマ・フィスの小説に基づき、グreta・ガルボ、ロバート・テイラー主演で、1937年に公開されたアメリカ映画。
- 51 北京王府井に面した総合的市場で、1903年に開業している。地図参照。
- 52 1935年に国民党に逮捕され処刑された瞿秋白（1899～1935）がロシア語から翻訳した文学関係の論文や作品を、彼の死後、魯迅が集めて『海上述林』と名付けて、1936年10月に出版したものだ。
- 53 漢方という、肋骨が痛み、嘔吐、下痢を引き起こす病気。
- 54 5月2日の蕭軍の返信（軍－1）に番地を間違えているという指摘がある。
- 55 蕭紅が単身東京に行ったのも、また予定を繰り上げて帰国したのも、共に蕭軍の女性関係に原因があるとされている。この手紙の注に蕭軍は「この苦しみは主として自分が与えたものだ」と言っている。そして、自分も彼女に劣らず苦しんだことを長々と述べ、聶紺弩の「在西安」中の蕭紅の言葉を引く。「私は蕭軍を愛しているし、今も愛している。彼は優秀な小説家だし、思想の上の同志、そして困難な中を一緒にくぐり抜けてきた。でも彼の妻でいることは苦痛なの……」。
- 56 注23参照。
- 57 紅－1（4月25日）に、宣武門内の太平橋で25号は見つけたが、米屋があるだけだった、とある。
- 58 「魯迅の遺著『且介亭』雑文一、二、三集のこと」（軍－2注）。
- 59 注23参照。
- 60 注41参照。
- 61 哈爾濱時代から交流のあった作家、舒群のこと。舒群は「黒人」という筆名も使っていた。
- 62 白朗のこと。注32参照。
- 63 当時中国に「アンナ・カレーニナ」（トルストイ）の翻訳があったかどうかは不明。『中外小説大辞典』（1990年2月、現代出版社）には周揚、謝素台訳（1956年、人民文学出版社）があるが、それ以前については記述がない。蕭軍と蕭紅は哈爾濱時代、ロシア語を学んでいたことがあるが、「アンナ・カレーニナ」を原文で読めるほどの力があったかどうかは不明である。
- また、蕭軍が自分をヴロンスキーに擬していることは自意識が鼻につくが、今から見れば二人のその後の人生（別離とそれぞれの再婚）を一部予言しているようでもある。
- 64 蕭軍は蕭紅が東京にいる間に中古の7弦のギターを買っている。蕭紅は12月5日の第三十一信でそ

のことに言及している（下注62参照）。

- 65 1930年代にアメリカのロバート・ジョンソンが使った、一世を風靡した手法、いわゆる「スライドバー」を使った「ボトルネック奏法」のことか。
- 66 「記念の本」は「魯迅先生紀年委員会」が編集し、文化生活出版社から出版された『魯迅紀念集』のこと（軍-2注）。「三冊」は注58参照。
- 67 原文は「足声舞」。蕭軍の説明の内容から推して「タップダンス」と訳した。
- 68 「この手紙は多分彼女が『道理を説く』（紅-7）と揶揄した手紙であろう」（軍-3注）。
- 69 原文は“孩子”。
- 70 「君の三通目の手紙」は5月3日付の手紙（紅-3）、「君宛の手紙（二通目）」は5月6日付の手紙（軍-2）。
- 71 紅-2（4月27日）に書かれている『八月の村』と『生死場』のことか。
- 72 蕭軍の散文集。1937年6月、上海文化生活出版社。
- 73 ロマーニヤの生活を描いた映画だと思うが、内容は忘れた、と注に書いている（軍-3注）。
- 74 紅-4（5月4日）に「暑い夏がいつまでも続くことはなく、暑さが過ぎれば秋の涼しさが来ることを知っています」という一文がある。
- 75 「あなたの二通の手紙」は軍-2（5月6日）、軍-3（5月8日）を指す。

彼女のこの手紙から、彼女の考えがますます混乱し、感情がますます沈んでいることがわかる。このような状態で、どうして落ち着いて創作ができるだろうか。一人の人間が根を下ろして生活できるだろうか。同様に、当時私の思想、感情、心境は……彼女よりずっといい、とは言えなかった。だから彼女は私の二通の手紙を読み、二度泣き、そして泣きながら手紙を書いたのだ！……私は手紙に何を書いたのだろうか。彼女を傷つけたのだろうか。それとも彼女の悲しい記憶を引き起こしてしまったのだろうか。それとも……思い出す術はない。知り合った当初、「山盟海誓（男女の愛が変わらないことを誓う意）」などとは言わなかったが、これまで、少なくとも私自身は、考えたこともなかった、我々に決別の日が来るなどということは。それは「死」の訪れを除いて想像もできないことだった。我々は、生理的にもほとんど一体で、二つに分かれてしまうことなどあり得ないと思っていた。——当時も絶対あり得ない、別れるはずがないと——生きていく中で、我々がどのような風雨に出会ったとしても、愛の試練の上で——ただ私自身に限って言えば——これまで決して少なくない障害や悩みを排除し、最後にはやはり彼女と毅然として同じ道を歩くのだと……「二心を抱く」ことはなかった。当時彼女も私に対して同様に「二心を抱く」ことはなかったように見える。ただ人は、結局は歴史の範疇、社会的基礎、現実の条件……そういったものの産物であって、束縛されるし、影響を受けるし、妨害も、誘惑も受ける……最初から最後まで変わらない人間や事柄など極めて難しいし、ほとんど不可能だ。ある者は続けて肩を並べて進んでいけるし、ある者は途中で別れることになる。ある者は別れてまた一緒になり、ある者は一緒になって再び別れる……ある者は友人から敵となり、敵が友人になることもある……誰が誰に服従するのか。何が何に服従するのか……これは永遠の矛盾だ。

苦しみと幸福は、一般には主観の範疇に入るもので、また多くは他人の目には当然と映るものだ。そしてそれらはしばしば実際の状況とは符合しないものだ。

この手紙からは、私に対する厳しい皮肉や揶揄があるが、私は怒りはしない。これは私が「修養」を積んでいるとか太っ腹だとかいうことではなく、彼女はそうであるべきだと思うからだ。彼女は「侮辱と損害」を受けたのだ。もし彼女が拳で私を殴るのなら、私は甘んじて殴らせよう。第一に、彼女の拳は痛くないし、私を傷つけることはできないから。第二に、彼女も本気で私を殴らないだろうから。私を殴ろうとしてきつと彼女は泣き出すだろう。そして恐らく笑い出すだろう。……私は彼女を理解しているから……（紅-5注）。

- 76 原文は“2毛”。
- 77 軍-2（5月6日）参照。
- 78 舒群。注61参照。軍-2（5月6日）に、舒群が北平に行った、と書かれている。
- 79 フランスの作家、ピエール・ロティ（Pierre Loti：1850～1923）が1886年にブルターニュの漁師たちの人生を描いた長編小説。紅-5注によれば、中国では生活書店から黎烈文訳で出版されている。日本では1916年に吉江喬松訳が博文館より出版されている。
- 80 ツルゲーネフ著。
- 81 軍-2（5月6日）の「君は長編か『印象記』^{エッセイ}を考えればいいよ。ニカ月のうちには少し書けるだろう」を受けているのだろう。
- 82 「この部分は元の手紙では線で消してあったが、読むことができたので元のままここに記録することにした」と蕭軍の注（1978.9.17）がある。
- 83 「これは蕭紅のもともとの注釈である」と蕭軍の注がある。
- 84 この手紙の注に蕭軍は、自分がすぐに北京に行けないので、彼女が上海に戻るようになった、と書いている。「私は彼女の強い性格をよく理解している。自分からは戻りたくなかったのだ。私が『御願ひ』し、また『命令』、そして『騙し』てようやく帰ってくる」（紅-6注）。
- 85 フランスの思想家ジャン・ジャック・ルソー（1712～78）の自伝で、死後に発表され、日本の近代文学にも大きな影響を与えた。日本では『告白（録）』と訳されている。
- 86 蕭紅がいつ上海に戻ったのか、覚えていない、と蕭軍は書いている（紅-7注）。
- 87 紅-5（5月9日）に、「もし読んだ方がいい本があればその都度送ってください。李家に置いておけばなくなることはない。上海を離れる時にも便利だから」とあるのを受けているのだろうか。
- 88 この手紙が北京から出した最後の手紙で、間もなく彼女は上海に戻ってきたと蕭軍はいう（紅-7注）。
- 89 北京市郊外の万里の長城。
- 90 盛唐時代の文学者、李華の作品で、戦場の悲惨な様をうたう。
- 91 「送ったのは恐らく『八月の村』と『生死場』だと思う。彼女が友人に送るためだ」（紅-7注）。
- 92 「最後の忠告の手紙」は軍-4（5月12日）のことか。蕭軍によれば、このくだりは彼女の皮肉で、彼女が「その通りやる」はずはないし、私が「サビを歌っている」と思っていたという（紅-7注）。

